

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	愛嬌のある訪問看護師でいるために --緊急訪問の現状と課題--
演者名	戸塚 朱美
所属	訪問看護ステーションゆうあい

【目的】

看護師不足の問題は慢性化しつつある。H26 年度になり当ステーションは欠員が生じ、一人にかかる業務負担が大きくなってしまった。スタッフ間で緊急対応を負担に感じ、“疲れ”を口にすることが多くなった。負担の増加に伴い、依頼内容の緊急性に疑問を感じたため、内容と傾向を調査し、今後の当ステーションの活性化につなげることを目的とした。

【実践内容】

期間：H26 年 4 月 1 日～9 月 30 日までの 6 ヶ月間

対象：訪問看護利用者、約 80 名

方法：訪問記録から緊急出動件数、内容、時間帯を調査

【実践効果】

緊急時訪問看護加算・24 時間対応体制加算同意者数は全体の 73%。

調査結果：6 ヶ月間の緊急訪問件数は 98 件で、2 日に 1 回の割合で緊急訪問した。

緊急訪問内容：全体の 30%が排便援助だった。その他、介護者の不安も多く、20%を占めた。

訪問時間：(8 時 30 分～17 時) 80%、(17 時～24 時) 15%、(0 時～8 時 30 分) 5%

依頼者：家族 56%、主治医 14%、ヘルパー 14%、ケアマネジャー 7%、本人 7%、その他 2%

電話相談 (17 時～翌 8 時 30 分)：19 件(排便 11 件、症状の相談 5 件、内服薬 2 件、その他 1 件)

【考察】

調査内容から排便援助や介護者・本人の不安の軽減は全体の半数を占めていた。また、依頼者を見ると、ヘルパー・ケアマネジャーからの連絡が 21%で家族に次いで多い。そのため、家族同様、サービス担当者間でも日頃から、個々の利用者の状態を理解できるように連携を密にする。経過観察の判断基準を共通認識し、不安の軽減を図ることが重要だと考える。緊急対応の多いケースには、日々のケアを見直し、早めの対応を検討することで緊急訪問は回避できる。そうすることにより、スタッフの気持ちに余裕が出て、周囲に丁寧な対応ができステーション全体が元気になることを期待する。